

中国の大学生における「秘密」の捉え方

広州市の学生の事例から

大田千波留(九州大学大学院人間環境学府)

「中国の政治」と聞くと、すぐに、怖いものである、その政治に触れることはタブーではないか、といった話が必ずといっていいほど出てくる。中国政府が、共産党が、人民に対してあらゆることを統制し、規則化している。上から覆いかぶさるような政治体制がしかれ、政府が強い力を堅持している。そのような状況の中で、人民は窮屈な営みを強いられている。といったイメージが先行している。実際、それも中国の現状を示しており、一側面と言える。

しかし、長期にわたり、中国国内に居住し、現地調査をおこなう中で見えてくることは、一般に「政治」を話題にすることはしごく日常的なことであり、むしろ、それを好むような傾向が見られるということである。人々は政治的なさまざまなことを語っている。共産党も人民が政治批判を話題にする程度で動じることはない。共産党一党統治という政治体制の中で、人々は「緩やか」ともいえる政治の中を生きている。むしろ、上から覆いかぶさるという強い側面よりも、柔軟な動きをする共産党が存在し、また、党の政策に単に準じる形ではなく、より自由な選択をしている人民の姿が見え、両者が相互に影響しあっている。

本発表では、中国の「緩やか」な政治という側面から、その中で生きる大学生の政治に対するとらえ方を理解することを目的としている。学生の入党という政治的实践を通して、その中の「秘密性」に焦点を絞り、それがソトに向かってどう語られ、その中で秘密がどのように読み込まれていくのか、秘密にすることによって、ソトとどのように距離を保つかを考察するものである。調査対象は主に中国広東省広州市W大学の学生である。

現在、大学生が共産党に入党するのは以前に比べ、時間をみても手続きをみても簡素化されている。入党する理由は単なる政治的活動がしたい、党の政策に賛同するという主体的なものから、他者に勧められた、なんとなく入ったなどと受動的な理由へと変化し、主体的に入党する学生は少なくなっている。しかし、最終的に入党は自己決定し、それは意図的な行為である。その大学生が入党するという意図的な行為をおこなう中で、その実践を「ソト」に向かって語るとき、そこには無意識に、共産党はきっとこういうふうにするように自分たちに要求しているだろうと、彼らが読み込み、判断している。秘密になること、することは共産党が明確に示したものに準じているのではなく、学生自身の認識によっている。ここでいう「秘密」とは実際に共産党が決定したのではなく、学生自身が「共産党のコード」なら、これは秘密にすべきだろうと読み込んだものである。入党に関する内容が秘密になるときは、いつもであり、しかし、いつもではなく、その場や対象によって臨機応変な変容を見せる。公的な場、私的な場での差異は当然のことながら、対象が友人、教師、外国人、黨員、非黨員と変わることで、その秘密になるとき、なることが変化する。彼らが秘密とすることに、明確な、共産党が規定した“秘密”があるわけではなく、学生が無意識に、そこに共産党の「秘密性」を読み込み、創り上げているのではないか。「それは国が“秘密”としているのだから」と、彼らが読み込み、それを語らない、もしくは秘密にするという選択をしているということである。逆説的に考えれば、ソトからその入党という意図的な行為を問われたときに、その時や相手によって読み込み方や語り方を変えていくのである。学生は入党するという政治的实践を営んでいるが、党が定めたコードにのっとなって行動するのではなく、ソトが政治に関することに入りこもうとすることで、彼らに新たな党のコードを創り上げさせていると言えるのではないだろうか。そう考えると、秘密になるときもまた、彼らのコードを読み込むという操作によって創られている。彼らがある種の政治に関する一定の共通の認識をもっているというより、それぞれの学生がさまざまな政治認識をもち、行為化したものを、ソトが彼らに共通の認識がある、それは党が規定したものであると読み込んだだけのことなのではないだろうか。従って、彼らの行為は、共産党が作った、規定したコードに則った意図的な行為であるというよりはむしろ、共産党を下から眺め、そのコードを自らが創り上げるような、無意識のうちにおこなう実践である。ここには既存の共産党とは異なる、学生によって読み込まれた「共産党像」が存在するのである。政治権力に翻弄されて生きるというのとは異なった、もっと自由な政治的営みが実践されているのである。

【 秘密、大学生、共産党、入党、中国 】